

第四章 万年筆類題

一 こぼれ話

こんな話がある――

万年筆の広告が明治十八年頃と推定される「和洋書籍及文房具時価月報」に掲載されたものが最も古く、これによると当時販売されていた万年筆は、カウスのスタイログラフィックペンというものであって、軸先に針が一寸のぞいていて、書くときに用紙の上に軸先を付けると針が引込み、針の周囲からインキが流れ出る装置になっていた。これがいつ頃から輸入されたかについては、明治四十五年、丸善文房具目録に、「丸善が万年筆を初めて取寄せましたのは明治十三、四年頃、今から三十年以前でござります」という文房具部善太郎の記事があり、また、岩波書店発行「近代日本総合年表」一八八四年（明治十七年）には「丸善がスタイログラフィックペンを輸入販売（万年筆の初め）」とある。従って二十年代には已に盛んに売り出されていたことは確かである。この万年筆の売出しに最も力を入れたのは金沢廉吉の弟で、明治五年四月に入社した金沢井吉であった。彼は店での通り名を万吉といったから、誰いうとなくスタイログラフィックペンのことを万吉筆或は万さん筆と称し、何時となく更に転じて万年筆と呼ばれるに至ったという挿話が伝えられている程である。（「丸善社史」六五頁）

へることであつたらう。これに思ひ付たのが発明家の鉄砲鍛冶である近江の国友兵衛一貫斎で当時の新発明品として御懷中筆と名づけ作り出した。其の図と説明を書いたものが先年江戸科学展覧会に陳列されてゐたが実物はまだ見ない。しかし金属製の軸に墨汁を蓄へ先端に筆の穂先を嵌めたもので其の作用からは万年筆と同じ着想である。

この一貫斎の懷中筆と殆んど変らないものが堺浦の芝達保敬によつて自潤筆と名づけて製作発売された。大体天保頃と推定されるが、墨汁を軸に蓄へて置く今日の万年筆とも見るべきものである。私の家に一本伝はつてゐるが、三つの部分から成り軸は真鍮製の管で墨汁を入れ綿で詰め先端には筆の穂先を嵌め、穂先を保護するキャップが先端に捻付で冠せられ、尾端にも捻付の蓋がありそれに孔があつて紐で腰に下げる様になつてゐる。この自潤筆の説明には、

殿中或は旅行馬上、又は写物聞書等記録の節、墨を接におよばす、管中より自潤（細）出る水は寒氣に不（少）氷、日数へてかはく事なし。ふと書（少）の節は筆を少し管中へ押込候得ば、墨多く潤（少）ふとく出来申候、細書の節は少し外へ出し候得ば、墨潤（少）すくなくほそく出来申候。（句点及ふり仮名は筆者付記）

等と認められてゐる。一貫斎のは懷中筆とされるばかりだが芝達のは自潤筆と名づけられて筆の働を現してゐるのが面白いと思ふ。（「学鑑」昭和十六年三月号十四頁）

最近リバイバル・ムードが盛んで、まさかその波に乗つたという訳でもあるまいが、毛筆の万年筆が市場に現われて来た。その材料はちがつていても、外觀・内容などは恐らく自潤筆を想像するに足るものがあるだらう。

ところで、明治十八年十月の「東京横浜毎日新聞」に万年筆についてつぎのような記事がでている。

筆の軸にインキを溜めて万年筆を発明

西洋紙に書くもしばしばインキ壺にペンの尖を入れざるを得ず、新聞記者、著述家の手をして、インキ壺と用紙との間に奔命に勞れしむる者は、西洋筆に固着したる不便なり。此に日本橋区本石町時計商大野徳三郎氏なる者あり、一種の筆を発明し名づけて万年筆と云ふ、形、普通の鉛筆の如く、其軸中に洋墨を詰め、螺旋緩急の作用にて、或は細く自在に書くことを得、一回墨汁を詰め数日使用して尽きざるの便ある者なり、束髪会起りて女髪結胆を冷やし、羅馬字会起りて漢学者流狼狽せり、此万年筆世に出では漢筆の二ニの者、一大革命をうくること遠きにあらざるべし。

この記事によると、大野の発明は、丸善がスタイログラフィックペンを輸入するようになった時よりも一年遅く、恐らく彼は、丸善とは別個にそれ以前に來朝した外国人の誰かが所持していたものを見せて貰い、本業の時計屋として習得した指先の器用さを利用して、類似のものを作り、売り出したものと思われる。しかも新奇を好む人々の興味をそゝり、相当の販売成績を納めた模様である。幸いにしてこの発明から五年後の明治二十三年二月一日刊行のサンガー原著「万国娼妓沿革」(History of Prostitution)に、その広告文が出ているから、左に転載しておく。

大野徳三郎新発明 専売特許

懷中速記 万年筆

イ号 金三拾五錢 ロ号 金五拾錢 ハ号 金七拾錢 ニ号 金八拾錢 ホ号 金九拾錢

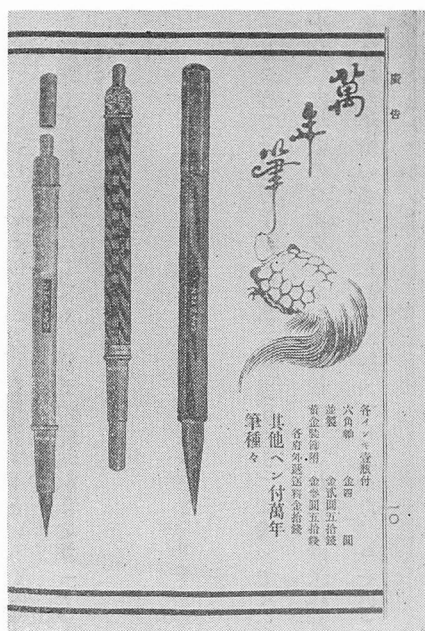
○注入器 金五錢 但イロハ号而已ニ用ユ

近時便捷速記ヲ要スルモノハ何レモ鉛筆ヲ用ユル事ナレドモ鉛筆ハ別ニ小刀ヲ具ヘ極メテ急速ノ際ニハ時々之ヲ削ラサルベカラズ加之久ヲ経レバ字跡消滅ノ憂アリ殊ニ我国在来ノ筆硯墨汁ノ如キハ優遊閑暇ノ時ニハ左マテ差聞ナキモ緊急ノ場合若クハ旅行中等ニハ甚シキ手数ヲ要シ従テ時間ヲ費シ所用ヲ欠クノ憂少ナカラズ然ルニ此万年筆ハ金屬ヲ以テ製造シ管中ニ器械ヲ備ヘ「インキ」ヲ貯ヘ使用ノ度ニ応シ「インキ」ヲ浸出スルノ仕掛ケニテ始終入用ノ「インキ」ト浸出ノ度ト鈞合ヲ同フセシ工夫ナレハ其使用携帯ニ便ナルコトハ又鉛筆ノ比ニアラズ且ツ一回「インキ」ヲ入レ置ケバ十行罫紙二百枚ハ充分ニ書キ得ベシ左レバ学校生徒ノ作文又ハ書取○演説又ハ裁判ノ傍聴筆記○武官警官収税官ノ手帳銀行会社ノ簿記○郵便はかき羅馬字等ニハ尤モ此筆ノ得意トスル所ナリ江湖ノ諸君広ク御愛用アランコトヲ乞フ

此の文意から察すると、現行のものと略機構が同じで、これを以って万年筆国産第一号に擬することが出来るだろう。しかもこれだけの機構を持ちながらその最高級品は、丸善が輸入した並製品の約三分の一の価格であったから、恐らくその売行きも順調であつたろうと思われる。尤も輸入品はあらゆる点で精巧であり、素材もすぐれたものを使用し、その上輸送料や販売店の利潤も含まれていたから、コスト高になるのも止むを得なかつたであろう。因に森銑三著の「明治東京逸聞史」第二卷一〇九頁には、坪谷水哉の「飛びあるき」を引用し、万年筆にマンネン

フデの振仮名のあることを指摘し、その頃このように呼んだものだろうと述べている。このように、早くから万年筆の名称が使われていたから、前述の挿話は一種の伝説に過ぎず、仮に一步をゆずってこの挿話をそのままに受けとつても、金沢井吉が、自分の名前を商品につけて貰つて喜ぶ程大それた考えはあるまいし、丸善としても発明者でない店員の名前を売品につける程非常識ではなかつたろう。是には他に根拠となるべきものがあつたと想像され、そのためにも次の図を注視して貰いたい。

此の図は明治三十年「学鑑」第二号に載せられた広告文で、所載の三本の万年筆の中、二本は丸軸、右端のものが六角軸であるが、凡てスタイログラフィックペン (Stylographic Pen) であることには間違いがない。それは兎



「学鐙」万年筆廣告

も角として問題は、此の筆の名前の説明に、一匹の海亀の口から「万年筆」なる文字が吐き出されているところにある。いつ誰がつけたか、そしていつ Fountain Pen の直訳である泉筆に代つて此の名称が登場したかは明らかでないが、万事縁起を担ぐ日本人であつて見れば、古来から言い慣された不老長寿を祝ぐ御芽出度い辞として神仙伝説に「仙人之徒（略）是類ニ亀鶴大椿、愈長且久不_レ足_レ尚也」とあり、我国でも「鶴は千年、亀は

万年」と云われている位だから、長持をするという意味でこの文字をつかったものと考えたい。——万年筆に関する詮議立てはこれ位にしても、洋式万年筆輸入の第一人者としての榮譽を千載に残すものが丸善である点では易りがない。

二 宣伝あれこれ

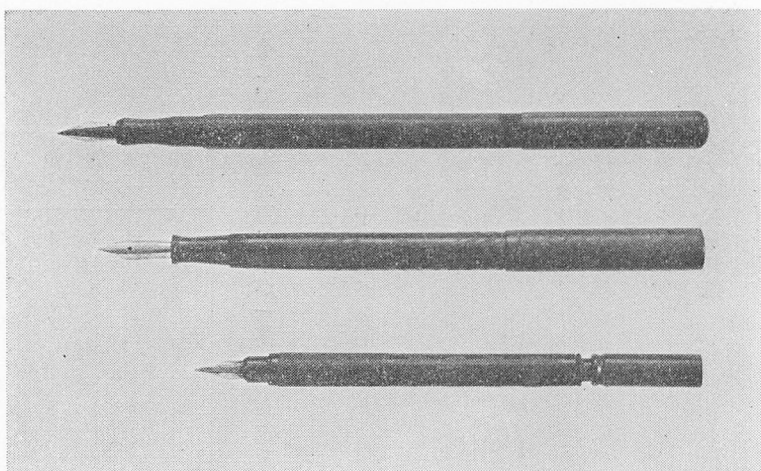
ところで針付万年筆 (Stylographic Pen) に代ってペン先の付いた所謂 Fountain Pen が輸入されたのは明治二十八、九年頃のウオターマンが最初で、これ以後欧米各社のペン付万年筆或いは万年ペンの輸入が盛んになり、前者は針万年筆の名称を止めるに終ってしまった。今そのころから明治末期にいたる、それら各社の製品を表にするに左の通りである。

年代	商 品 名	同 原 名
二八	ウオターマン	Waterman's Ideal Fountain Pen
三〇	ペリカン	Pelican Self Feeding Pen
三三	カウ	Caw's Safety Fountain Pen
三三	スイフト	Swift Reservoir Pen
三六	ドラゴン	Dragon Fountain Pen
三六	ドット	Dodo Fountain Pen
三六	スペンセリアン	Spencerian Fountain Pen

三八	グ	Gravity Fountain Pen
四〇	オ	Onoto Fountain Pen
四一	ク	Craft Fountain Pen
四二	ゼ	Zenith Fountain Pen
四四	オリオン	Orion Fountain Pen

そこでこれ等の万年筆が一体いくら位で売出されたかが問題となるが、当時としては驚く程高価であったのである。即ち

ゼニス十四金ペン附	二円五〇銭
オリオン無飾	二円八〇銭
オリオン飾付	三円二五銭
カウス	自三円〃至六円
ウオターマン	自五円〃至一四円
ペリカン並製	六円
ペリカン金飾付	八円五〇銭
オノトN号無飾	六円
オノトN号銀飾	七円



万年筆各種（上からオノト ウオターマン ペリカン）

オノトN号金飾

九円

となっているが、この中オノトに至っては、装飾付のものが六十
五円迄とあり、其他

G号並製

九円五〇銭

M号並製大形

一二円

M号銀飾付

一三円

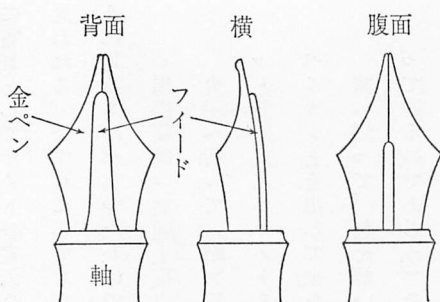
など多種多様である。当時一般の社員の俸給は、初任給で三〇円
から四五円位まで、月五〇円もあれば三人家族で結構生活が出来
た。建築なども坪（三・三平方メートル）当り五〇円も出せば、
充分雨露がしのげる住居を新築することが可能だったから、ゼニ
スやオリオンの如き「実際の」万年筆は兎も角として、「理想的」
と称せられたウオターマン、ペリカン、オノトは、庶民にとって
は全く高嶺の花であった。それにも拘らず丸善が販売宣伝に最も
力を入れたものは、ウオターマンとオノトで、特に後者の売込み
には全力を傾倒したかの観があった。その頃売出し中の文学者馬
場孤蝶や、少し年代がおくれるが、長田幹彦などが、新聞、雑誌

に隨筆としてオノトの宣伝をしているのも、当時丸善の宣伝文を一手に書いていた内田魯庵の要請によつたものと思われる。いづれにしても文学者たちが万年筆売込みに片棒を担いでいる位であるから、丸善の意気込みも壯とするに足るものがあつたわけである。今参考の爲、前掲二文学者の名文から要点を摘出して見よう。

馬場孤蝶「無題―東京日々新聞（「学鑑」明治四十二年七月号転載）」

丸善へ行って（略）田中氏に、ファンテンペンを見せて呉れと云ふと、何が宜いかと聞かれたが、予は、ズツと前に友人がオノトを買つて居たのを見たことがあるので、オノトは何うだらうかと云ふと、直ぐ、それと、ペリカンとを出して来た。オノトの飾無しのは、六円だと云ふので、それを買つた。

家へ帰つて、包を解いて泉筆（丸善の目録には、万年筆と爲つて居る。世上でも、普通は、其様云ふ名で通つて居るのであらう）を出して見ると、ペン尖は、金色燦爛として居て、甚だ心持が好い。紙を取つて、試みに字を書いて見ると、何の音もせず、字がヅン／＼出来て行く。宛然に輕舟を急ならず緩ならざる流れに随つて放つたとても云ひさうな心持である。並のペンではガリ／＼音が為るのであるから、われ／＼神經衰弱の輩には、何うも気が昂つて、少し長いものでも書いた後では非常にイヤな氣持になるのであるが、それが泉筆だと、筆当りが和らかなのとペン先が自由に働くのとで、氣分が落ち着て居て、滑らかに思想が出て来るやうな氣が為る。或は又、興に乗つて、筆を走らせようとすれば、全く字義通りに筆が走るのである。ペンに墨汁を一々附ける世話が入ら無いのであるから、考が散ら無くつて宜い。要するに、文人必携の道具である（略）馬場がこゝで殊更古めかしい泉筆と云う文字を使つたように、その頃のオノトのペン先も、今では一寸見られな



オノト万年筆のペン先

いからくりが加えられていた。挿図のスケッチでもわかる通り、ペンの腹面にフィード (Feed) と称する舌状の弁があり、背面には花蕊に似た針状の弁があつて、この二つでペン先を挟み、インキの調節をはかっていたものである。馬場の云う泉筆は多分こうした装置が設けられたものを指したので、オノトがフィードを腹面だけの単式フィードに改めたのは、明治四十四年以後のことであろう。と云うのはこの頃のオノトの広告に、この両方の万年筆が並んで掲載されているからである。

長田幹彦の文は「十二年間をこのペンと共に」という長い題がつけられ、大正十四年四月一日付の「週刊朝日」に掲載されたものである。

(略) 私の今使つてゐるペンは、大型の「オノト」である。現にこの稿もそれで書いてゐるのであるが、このペンは今を距る丁度十二年前の大正三年の春、「丸善」で購めたもので、確か価格は十二円半であつたと記憶してゐる。私はこれを手に入れて以来足掛け十二年といふ長い間、唯の一日たりと雖もこのペンを手にしない日はないのである。又旅に出る時も必ずこのペンは影の形に添ふが如くに私に伴いて来た。北は北海道の果てから、西は山陰山陽の国々まで、このペンは限なく旅して歩いてゐるのである。

私の創作的生涯から云つても、十二年と云へば殆んどその大部分を占め

てゐる。短篇長篇取交ぜたら、その間に私が書いた作品は恐らく梁にまで達するであらう。その枚数、その字数、それは到底私自身でも数へ上げることは至難である。仮りに三万枚の原稿を書いたとしても、字数の総数は実に一百二十万字に上るのである。その他私信やいろいろのものも無論このペンに依って書いたのであるから、その総てを加算したら到底数へ切れない程夥しい字数に上るのは明かである。私の胸奥から滲み出る鏤心の文字を写し、又或は起伏の多かつた私の過去の生活を静かに机上から眺めながら、このペンは到頭十二年の間、私と共にこの世の中に生きて来たのである。(略)私は愛蔵してゐるといふやうな余裕のある感じではなく、もうこのペンの胸中へ私の靈魂や生命が聾と喰ひ入つてゐるやうな心持ちで、今も猶ほ日夜このペンに依つて新しい創作的感興を呼び覚されつゝあるのである。(略)

これは單なる讃辭でなく、長田個人の実感であらう。然しその率直な実感が却つて、こよなき讃辭となつてゐる。文学者の不思議な靈感であるとも言えよう。これらの外部の宣伝に對し、内部に於て主としてその広告文を起草したのが、内田魯庵であつた。今、内田が苦心して作つた広告文の代表的なもの二、三を拾つて見よう。

「学鑑」明治四十三年十月号には左の広告が載つてゐる。

万年筆の広告は最早馬鹿々々しくなれり、今日にては中流以上の紳士貴女にして万年筆を用ひざるもの殆んど無ければ也

併し乍ら万年筆の便利を十分熟知せらるゝ諸君は更にオノトを使用してオノトが日本文字を書くに最も適する毫も毛筆と異ならざるを試みられん事を欲す、オノトは局紙、模造紙、鳥の子、其他原質の日本紙に縦横揮

瀧するを得、オノトは日本人向き也

漢語交りの此の広告文は一見して生硬、古風な文体で、殊に「万年筆を用ひざるもの殆んど無ければ也」の一句は、聖書の古い訳にしばしば用いられた特殊な語法である。オノトの売込戦術は、店頭掲示の広告や、機関誌利用の宣伝にとゞまらず、学園侵入を企だてたようである。その一例として、明治四十四年二月の早稲田大学機関誌「早稲田学報」に次のような広告が掲載されている。

机上に君子あり金ベンの冠を戴ききんけんとくろくをまとひ黠沢の護謄衣を纏ふ風采高雅、自ら称して万年筆と曰ふ、常に自語して曰く吾性剛直なりと雖も好んで人の役に服す、時と処とを忖はず主人喚へは即ち応ず、事を処する輕便敏快、其楮先生ちせんせい（紙のこと）に接するや胸中蓄ふる所のインキを披瀝して以て主人の意を伝ふ宛も春蚕の糸を吐くか如く二万余言立どころに成る、然るに吾徒は金冠の頂尖に白金或はイリヂウムを装ひ以て長生不老の符と為す是以て強健堅固、甚た使役せらるゝも困憊こんばい衰耗するに到らず、今の主人は本と学生、業を卒へ身を起して名流の班に入り天下に縦横す其間幾許年ぞ、吾常に左右に随伴し時には机卓に時には衣兜に、未だ一日も相離るゝことあらず、主人吾を撫して不言の秘書官と為しちやうざん籠眷日に厚し、吾も亦将さに益々大に報ゆる所あらんとす。

随分想いをこらし、字句を鍊った名文であるが、大学向けということを意識していたからであろう。この作風は容易に改まらず、大正三年代のもものではやゝ改良のあとがあるが全体のムードは、昔ながらの風格を示していた。

試みよ、此の有力なる万年筆を試みよ、オノトを使用して後初めて全的に完備したる万年筆の如何に愉快と敏活に富めるかを知るべし（大正三年三月号）

三セシと一セシ大文字「オノト」は皆つらう
ニヤシはミに似く

オノト ガアル

アメリカのお嬢さんには

学校でもお嬢さん

は皆オノトー、

オノトで書いた字は

美しくハッキリとして

書き替へる必要も無い

オノトと使用するお嬢さんには

学校では優等生

お嬢さんお父さんお母さんおの

く、お友達

オノトガアル

快活な新しいお嬢さんの

お嬢さんお嬢さんお嬢さん

内田魯庵自筆のオノト万年筆の広告文

万年筆の有ゆる特長は総てオノトに於て最
高に最大に最善に最美に具備するが故にオノ
トを使用せざれば万年筆の真の利益と真の効
果とを知る能はざる也（大正六年六月号）

がその例である。しかしこの古風な文体も年が経
つと共に、柔かい文句を混入するようになり、大
正四年ごろから、その傾向が現われて来た。

万年筆を持った顔と、持たない顔、

オリオン又はオノトを使用する人には

満足、歡喜、愉快、敏活、成功、勝利が得
られます。

万年筆を持たない人は？ アラス！（大

正四年三月）

女といふ女は皆万年筆を使用す！

女の中の女がポニーアルピオンを愛用す

（大正十年三月号）

殊に特定の相手によってはグット調子を和げたものが現われている。その好い例は写真版で掲出した前頁の女学生向きの宣伝文である。内田は「学鑑」編集の責任者で、自由にその才能を駆使し、同時に広告文案作成者でもあったから、文案に工夫をこらし苦心を払っていた。当時の広告課員齋藤哲郎に宛てた次の書簡は、その間の消息を如実に物語っているだろう。

再度の仰越し高等女学校でもアレでイ、と思ひますが同じ事と別紙(マツ)の通り書直しました 貴案オノトボードあの図案では難ですから「ひよこ」としたのですが図案がすでに小學生向きにて貴案も矢張小學生へあてたものらしく読まる夫を女学校程度にあらためる為めにはオノトボードなどとお伽話じみる語を用ゆるよりはオノトガルとした方がよからうと愚存 之で御勘弁

註 大正十五年六月二十四日 齋藤哲郎宛広告原稿並に長封筒に書かれた意見書

三 商人 氣質

内田は一商社のPR誌の内容を整備し、改善して一般に開放し、定期刊行物並に昇格せしめ、広い意味で日本の文化に貢献した点では異数の編集者であり、文化人であった。「学鑑今むかし」(「学鑑」昭和十一年四月号)と題した随筆で、柳田泉は「その頃我々の間では、内田さんから『学鑑』へ原稿を頼まれることが、一種の登竜門とみられて居り、「あいつも『学鑑』に出たんだから、一人前の本読みだ」等と噂をしたものだ。然しよく考へてみると、これは天下の読書子に丸善の提灯もちをさせてゐたのだ。だがその提灯もちをしてゐながらも悪い気持は少しもし

なかった。あれは、内田さんが偉かったからでもあらうが、一つは内田さんの頭の中に、単に自分の会社の利害と言ふ事だけでなしに、一国の文化の増進と言ふ考が絶えずあったからであらう。」と。まことに評し得てまた妙である。「学鐙」が、明治末期から大正時代にかけてわが国の文化にどれだけ貢献したかに就いては、前編で木村穀が「内田魯庵論」とも云うべき名文を執筆されていられるから詳細はそれにゆずるとして、こゝではその担い手の中心人物になった内田の横顔を素描しておくことだけに止めておく。それには内田と特に親交のあった宮田修が「内田魯庵君の追憶」(「学鐙」昭和十一年四月号)という一文を草しているから、内田と丸善との関係する個所を引用して見よう。

君は学鐙の編輯に尽力したのみでなく、更に丸善の為に殆んどその半生を挙げて陰に陽に尽力した。其の關係を思ふと、愈々不思議なやうな思ひがされるのである。本来魯庵と云ふ人は若い時から Free Thinker を以て任じ、何者にも拘束されない思想の持主である事を以て任じたと共に、其の境涯も世上一切の束縛を嫌って、悠々自適の自在境に在る事を欲した人であった。一時は随分窮迫して生活にも苦しんだ事があったが、而も定った職業の前に膝を屈して、一定の給料を得ようなどとはしなかった。(略)にも拘らず君は武士は喰はねど高楊子と云った風で、愚痴一つこぼす事なく、世間を白眼視して納って居った。是は、全く何物にも束縛され度くないと云ふ気持から出たものであって、其風格は何処か昔の儒者にでもありさうな趣があった。

その人が不思議に丸善との関係を結んで、而も殆んどその半生を献げ、且つ思ったより熱心に其の仕事に従事した事は、少くとも同君の性癖を知って居る筆者には、不思議な因縁であったとしか考へられない。

宮田の此の疑問は、内田と親しかった人々の間でも同じ疑問だったに違いない。清貧に甘んじた内田が、金を得るために丸善に入社したとは考えられない。強いて云えば、何かしら氣に入ったところがあつて丸善に入り、定収を得て家族を安堵させることが出来たと共に、与えられた職域が自分の才能をふるうに充分であつたのだから、水を求めて得た魚の感があつた。彼の息子の内田巖は「丸善会社員 父」〔学鐙〕昭和十一年四月号〕という追憶記を書いているが、その一節に、

父が丸善へ入社したのは明治三十三年僕の生れた直後であつた。「丸善へ入ってから始めて定収を得られるやうになり、生活の不安が一掃された」と母は云つてゐる。僕の生れた其年の二月頃は出産の瞬間さへ金策に出歩いてゐたのだから、丸善入社の際の母のほつとした心持がよく判るやうな氣がする。父も丸善へ入社した事を喜んだに違ひないし、其満足が一方例の皮肉な調子にからんで「俺は文士ではない会社員だ」と力ましたのであらう。文士と云ふ職業は何となくだらしのない職業であり会社員と云ふ肩書はそれと反対に甚だ地道な感を与える。父は自分の子供の学校へ提出する書面に保証人、会社員、内田貢と書いたのである。——と。

この話を見ると内田の面目躍如たるものがあるが、それにもまして会社員を自認した処に何かしらホツとした氣持を抱いたその心境を測度することが出来る。しかしこれには彼を受け入れた丸善当事者の襟度をも充分賞めておかなければなるまい。此の点、宮田は前掲の文に続いて次のように讃辭を吝す述べている。

勿論これは一方に丸善の当事者が、同君の性格を諒解して、頗る寛容に待遇し、少しも窮屈に束縛する事になかつたからにもよらうが、それでも若しこれが他の場所であつたらば、同君はあれ程長く關係を続ける事は

無かつたらうと思ふ程自由の愛好者であり、自由自存の権化であつた。にも拘らず同君が丸善の仕事にあれ程の興味を持って、一年は一年より段々熱心を重ね、晩年には少し位健康の不充分な時でも、出社して店を歩き廻ったり、事務室の机に座らなければ気が済まないやうであつたのは、全く君が性癖とも云ふべき書物愛好の興味に合致するものがあつたからであると思ふ。

「オノト―内田―丸善」とこう書けば、何か落語の三題噺めいていさゝか面映ゆい感じがするが、最近聞いた話で大いに感動したものがあつたから、一挿話として書き留めておこう。語ってくれたのは、ユネスコ協会連盟の関忠志元事務局長で、話といふのはこうである。

明治の末期から大正の初期にかけて関如来と称する有能な新聞記者が読売新聞社にいた。内田とは特に親交があり、所謂莫逆の友であつた。ところでオノトが初めて丸善に入荷した時、記念として内田と共にオノトを一本宛貰つた。如来と丸善とは特別な繋がりになつたから、関がこれを贈られる理由は毫もなかつた。しいて言えば内田との繋がりによってこうした恩恵に浴したものと思われる。いづれにしても爾来十数年間これを愛用した。たまたま大正十二年にいさゝか狂いが出たので丸善へ修理に出した。この時関夫人の指輪に真珠をはめ込むので、日本橋のさる有名な宝石商にあずけておいた。そこへあの大地震である。震災のあと始末が出来てホツとした或る日、如来はフトこのことを想い出した。そこで忠志少年に預り証二通を渡し、取りに行くように命じた。少年はまず宝石商を訪れて預り証を見せて返戻を求めた。ところが応対に出た店員は、「この

ように当店も災難に遭いましたので、おあずかり品もなくなりました。」とにべもなく断わったという。少年は子供扱いにされた忿懣も手伝って大きな憤りを感じたが暖簾に腕おしではどうにもならなかった。この調子では万年筆もどうせ返してはもらえないだろうと思ったが、取あえず丸善へ行ってみた。取次の店員に預り証を見せると、一寸待ってくれと云って奥へ入ったが、やがて主任とおぼしき人が出て来て、「お預り品は焼けてしまいました、まことに申し訳ありませんが、その代りにこゝに並んでいるもののうちから、どれでもいいものを一本お撰び下さい。」と、いとも丁重な挨拶である。

少年が感激してその申出に従ったのは云うまでもなからう。――

この話を聞いて、何かしら心の温まる想いをしたのは筆者ばかりではなからう。この店員は多分大塚金太郎文具部長であつたろうが、それにしても「丸屋商社之記」(損失アル時ノ心得)に「大概商業ニ危害ヲ帶ザルモノナシ故ニ永年ノ間ニハ災害モ過失モアルモノト思フベク常ニ其心得ナクテハナラヌモノナリ若シ不幸ニシテ災害ニ逢フモ又商売上ニ損失アリトモ急ニ之ヲ復セント思フコト勿レ」と云う創業の精神を守り、これを地で行つたものと云えよう。大阪商人の鉄則に「損して得とれ」と云う言葉があるが、これは何も関西商人だけが守らなければならぬものではなく、商人たらしとするものの金科玉条でもある。丸善の場合でも文具部長は商人として当然の心掛けを行つたに過ぎなかつたのであらうが、一本の万年筆で、高い信用と、永い顧客を引き止めた功績は大きい。そして各時代の経営者に一貫した商人根性、指導原理が図らずもこゝに現われたものとして高く評価すべきであらう。丸善が万年筆売込みに最も力を入れたのは先きに述べたようにオノトで、これについてオリオンやウオターマン



「ポーツマス講和談判」白滝幾之助作
(明治神宮絵画館蔵)

が始まって、輸入が困難になったのをきっかけに、丸善の取扱第一線から脱落してしまった。

などがあり、その他のものはいつとはなく店頭から影をひそめてしまった。このうちウォターマンは、日露戦役終結のときのポーツマス条約で、露国全権ウィッテ伯が、ロンドンのデリー・テレグラフ露都通信員デロン博士所持のものを借りてサインに用いたところから、ポーツマスペンと呼ばれ、一時大変な人気を博した。その結果、大正二年五月三十日にロンドンで締結されたトルコとバルカン同盟諸国間の平和条約並びにブカレストで締結された、ハンガリーとルーマニアその他の諸国間の平和条約のサインにも、ウォターマンが使用される程の名声を博したが、第二次世界大戦